

フェルナン・デュモン著
『記憶の未来——伝統の解体と再生』
(伊達聖伸訳) 白水社、2016年

Fernand Dumont,
L'avenir de la mémoire, Québec, Nuit blanche, 1995.

丹羽 卓
NIWA Takashi

フェルナン・デュモンは20世紀後半のケベックの最も重要な思想家かつ社会学者だと言えよう。にもかかわらず、日本ではカナダ研究でもケベック研究でもほとんど注目されてこなかった。恥ずかしながら評者がその存在を知ったのも、2003年頃のジェラルド・ブシャール教授との会話においてであった。ブシャールはデュモンの高弟でありながらデュモンを乗り越えるべき対象として、20世紀末にケベックの将来展望を切り拓いていった思想家と言える。現代から見れば、デュモンは「ある時期までは時代を先導する位置にいたが、ある時期からは時代に追い抜かれてしまった」（「訳者解説」143頁）人なのであろうが、ケベックがどうあるべきかを思考する現代の思想家たちにとって、避けて通れない巨大な存在であるのもまた事実である。それゆえに、本書の刊行によって、ケベックの思想史上重要な価値を持つ思想家が日本に紹介された意義は大きい。原著書が出版された1995年、はケベックで主権獲得に向けた2度目の州民投票の実施された年で、多くのケベックの人々のアイデンティティがフランス系カナダ人からケベック人へとすでに転換していた頃である。その意味では、本書は「出版時点ですでに反時代的なアクチュアリティを持っていたがゆえに、今でも反時代的なアクチュアリティを持っているような本ではないか」（「訳者解説」144頁）という解説者のつぶやきに評者も賛同する。デュモンはケベックを研究する上で1つの参照軸となる人物で、現代を考える上で決して見過ごすことなどできない。

では、本書はどのような書物なのか。実は、本書はフェルナン・デュモンの著作の翻訳であるだけでなく、それ以外に2名の著者がいる。「日本語版への序文」の著者セルジュ・カンタンと「訳者解説」を書いた本書の翻訳者がそれである。それぞれの長さで見ると序文が40ページ、本文が92ページ、解説が47ページとなっており、本文以外が添えものの序文や解説などではなく、どちらも充実した内容で、本書を単なる翻訳以上に価値あるものとしている。序文ではデュモンの生い立ちから始まって、その学問的業績、政治的活動が描かれ、続いて、彼の思想的内実が詳しく語られている。だがその読解は容易ではなく、むしろデュモンの書いた本文を先に読んだ方が理解しやすい。さらにわかりやすいのが「訳者解説」であるので、読

者にはまずここから読み始め、次に本文、最後に序文を読むのをお勧めしたい。したがって、本書評もその順で書いていきたいと思う。

「訳者解説」は“『記憶の未来』の読まれ方、あるいは「ポスト・デュモン」の知の勢力図”と題されていて、非常に読み応えがある。デュモンの次世代あるいは次々世代の代表的なケベックの思想家を取り上げて、その人々のデュモンへの評価を通してデュモンを多面的に捉えるだけでなく、現代ケベックの知的見取り図を示すという優れた解説である。現代ケベックの知的状況に関心のある人には、本書全体の中でこの「訳者解説」が最も有用かもしれない。

この解説において、デュモンは「旧弊的な教会権力やブルジョワを批判するカトリック左派として、静かな革命を担う旗手のひとりで」（「訳者解説」142-3頁）、新しいケベックのナショナリストで主権獲得を目指した知識人だと描かれている。ケベックの近代化によるフランス系カナダ人の集合的記憶の希薄化という危機に直面してのデュモンの対応策は、伝統を再建することであった。これを後続世代がどう見ているかについて、訳者は3つの類型から代表的人物を1人ずつとりあげ、それぞれの意見を紹介している。ジャック・ボシユマン、ジェラルド・ブシャル、ジョスラン・レトルノーの3人である。そのまとめは的確でわかり易いが、何よりも、全員にインタビューをして、デュモンとの関係でそれぞれの考えを引き出し、それを説明に組み込んでいる点を高く評価したい。

次にデュモンの著作について述べよう。この小著は、彼の最晩年の考えを描いたものだが、一読して、具体性を欠き、抽象的な議論に終始しているという印象を受ける。次に思ったことは、デュモンはやはりフランスの思想的系譜に連なる人だということである。引き合いに出されるのは、主としてフランスの思想家であり、いくらかその他のヨーロッパ人も登場するとはいうものの、アングロ＝サクソン系の人物は一切登場しない。ネイションとエスニシティ（デュモンの場合「ケベックの伝統」）について語るなら、英国のアントニー・D・スミスに触れてもよさそうなのだが、それはなされていない。社会の多元性も視野に置かれているが、それについての研究ならカナダや米国に当時すでにあふれていたにもかかわらず、一言も触れられない。さらに奇異に感じるのは、ケベックの人物とは言えば、歴史家のガルノーが2度登場するだけである。このことから、静かな革命期以降に活躍した思想家であるにもかかわらず、新世界よりも旧世界に重きを置く知的教養を体現し、そこから離れないでいる人のように見える。静かな革命期以降、ケベックは自らのアメリカ性に注目し、フランスから精神的に独立する方向へと歩みを進めて行った。その時代の流れからすれば、ケベックで失われてしまったフランス系カナダ人の伝統を再構築しようとするデュモンは流れに抗って立っているかのようである。

デュモンにとって意味あるネイションはフランス系カナダ人でしかなく、ケベックはネイションたり得ない。彼にとって、ケベックはフランス語系、英語系、先住民、そして文化共同体（つまり移民とその子孫）からなる政治共同体でしかない。それゆえ静かな革命以降広がっていった、ケベック州という地理的領域に根拠を置くシヴィックなネイション観に強く反対し、ケベックのすべての住民を包摂する共

通公共文化という理念を拒絶したのである (cf. L. Oakes, J. Warren (2007), *Language, Citizenship and Identity in Quebec*, Palgrave Macmillan, Basingstoke, UK, pp. 46-47)。その点でもやはり、彼は時代から取り残された思想家なのであろう。

しかし、デュモンが社会の多元性を無視しているわけではない。社会全体を無前提に承服させてしまうような伝統（その社会の超越的価値観）が失われてしまった中では、並立する価値観の間での対話が重要である、とこの著作の終わりの方で述べている。ただし、「異なるネーションを混ぜ合わせて、ひとつの独自の文化という喧噪の場に溶かし込むことを望むべきではない」（115頁）と言う。それゆえに彼が支持するのは、フランス系カナダ文化を中核として、その周辺に配置された複数の文化共同体がそれと対話によってつながれるという「収斂の文化」モデルとなる。これを1980年代初頭にルネ・レベック政権が社会統合モデルとして提示したわけだが、そのままでは文化共同体は周辺にとどまり、中核に入るには同化というプロセスを経るしかない。これこそブシャールが厳しく批判する点である。

このモデルから間文化主義は発展するのだが、デュモンがそれを支持することはなかった。マジョリティ文化とマイノリティ文化の対話を通して、双方が変わることで新しい文化をつくりだしていこうというのが間文化主義だからである。間文化主義こそがブシャールが、そして現代ケベックの多数が支持する社会統合理念なのであり、ここでもデュモンは時代に取り残されたと言える。

「デュモンが取り残された」ことにばかり話が向いてしまったが、デュモンの本文の本旨は伝統の喪失と記憶の再構築ということにあって、それについては興味深い考察がなされている。その点についてはカンタンの「日本語版への序文」に基づいて見て行こう。デュモンは伝統の解体を近代の大きな特徴とみず。伝統は時間とともに大きく変化することはなく、世代を超えて伝えられるものだが、近代は産業化により社会と文化が激しく変化し、脱伝統化した時代だと彼は捉える。それゆえに過去を取り戻すために紙に記される歴史が必要とされるようになったと言う。記憶に対する文字としての歴史への警戒はデュモンのオリジナルではなく、ヨーロッパの思想史の中でプラトンにまで遡れるとカンタンは指摘する。そして彼は、ヨーロッパの何人もの思想家に触れた後、伝統の喪失の危機を訴える先駆者としてハンナ・アーレントを挙げる。伝統の喪失は「人間存在の深み」を失わせるが、それは新しい過去の発見につながる可能性もある。それを認める点でも、デュモンはアーレントと共通し、それゆえにこの2人に反近代のレッテルを張るのは不当だとカンタンは言う。そうであるなら、所与である伝統（「古い伝統」）に代わる、絶えず蘇生される「新しい伝統」を構想することができる。しかし、古い伝統が歴史を意味づけたように、新しい伝統にもそれができるのであろうか。デュモンはそれに対して希望を述べるにとどまる。では、そもそもなぜフランス系カナダ人の記憶を取り戻さねばならないのか。それは、フランスに見捨てられ、英語系の支配と圧力のもと生き残ったフランス系カナダ人の末裔としての矜持からなのであろう。

デュモンというケベックの思想上の巨人の残したこの小著をどう評価すべきなのか。カンタンは彼の最晩年の考えを描いた重要なものだとし（「日本語版への序

文」頁)、ブシャーはそうではない(「訳者解説」166頁)。その評価の違いはおそらく、デュモンの『記憶の未来』という書物に何を求めるかによる。多元化するケベックでフランス系カナダ人の記憶をどのように再構築するかという点に関心があれば、本書は十分示唆に富む。他方、ケベックを(マイノリティも含む)包摂的ネイションとして構築するにはどうしたらいいのかという観点からはそれほど重要ではないであろう。それどころか、ケベックの共通の記憶に背を向けるデュモンの態度は反動的に映るかもしれない。

デュモンをどう評価するにせよ、最初にも述べた通り、ケベック研究では避けて通れない人物であることには疑問の余地がない。小著とはいえ、その著作が翻訳され、興味深い「日本語版への序文」と充実した内容の「訳者解説」を付けて出版されたという意義は大きい。たとえ時代の進展に取り残されたのだとしても、現代ケベックを準備した重要な思想家として、今後の日本でデュモンが研究の対象とされるとすれば大いに意義あることである。

(にわ たかし 金城学院大学教授)